



外国语言学与
应用语言学博士文库

学習者同士のインタ
ラクションが日本語
学習に及ぼす効果

王文贤 著

日语学习者的 互动学习 效果研究



中国海洋大学出版社
CHINA OCEAN UNIVERSITY PRESS

日语学习者的互动学习效果研究

王文贤 著

中国海洋大学出版社

• 青岛 •

图书在版编目(CIP)数据

日语学习者的互动学习效果研究 / 王文贤著. —青
岛:中国海洋大学出版社,2013.8
ISBN 978-7-5670-0379-8

I. ①日… II. ①王… III. ①日语—学习方法 IV.
①H369.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 181526 号

出版发行	中国海洋大学出版社	
社 址	青岛市香港东路 23 号	邮政编码 266071
出 版 人	杨立敏	
网 址	http://www.ouc-press.com	
电子信箱	391020250@qq.com	
订购电话	0532—82032573(传真)	
责任编辑	程 君	电 话 0532—85902533
印 制	青岛双星华信印刷有限公司	
版 次	2013 年 8 月第 1 版	
印 次	2013 年 8 月第 1 次印刷	
成品尺寸	174 mm×230 mm	
印 张	10	
字 数	190 千	
定 价	26.00 元	

序

一

王文賢さんの博士論文がこのたび本として出版されることになり、この研究が中国の日本語教育関係者に広く知られるようになることを、王文賢さんの指導教官を務めた者として、大変嬉しく思います。

王文賢さんが学位を取得した日本言語文化研究プログラムは、政策研究大学院大学と国際交流基金が連携して運営する大学院博士課程です。本プログラムは、現在は左記の2機関による運営ですが、2009年までは、国立国語研究所が加わった3機関連携によって運営されており、王さんは、国立国語研究所の奨学金により修学しました。

このプログラムが一般の大学院と異なる点は、すべての学生が海外（日本以外の国）で日本語を教える非母語話者の現職教員であることです。王文賢さんは、他の学生たちと同様、長年の日本語教育実践の中から研究のタネを見出し、実践に還元することを目指した研究を行いました。以下では、この研究が中国の日本語教育に示唆していることに注目して、研究の特徴を述べたいと思います。

王文賢さんの研究の一番大きな特徴は、社会文化理論に基づいて、学習者同士の協働学習の意義を実証したことです。社会文化理論とは、学習の社会的側面に着目し、人間は独力で学ぶのではなく、他者との相互作用を介して

学ぶ存在であるとする考え方です。王さんは、これまでの中国の日本語教育が教師主導の知識伝授型になりがちであったこと、教室における学習者同士の相互作用が少なく、教室の社会的機能が十分に活かされていなかったことを指摘し、学習者同士の協働作業の記録をデータとして研究を進めました。具体的には、短い文章を聞いた後、ペアで文章を再構築する「ディクトグロス」と呼ばれるタスクを2カ月に渡って行い、タスクを通じた言語習得の効果を検証するとともに、ペアによる協働作業中の発話記録を分析しました。

学習者同士の協働作業は、クラスサイズの大きな教室でも実施できる効果的な学習方法ですが、多くの教師たちを悩ませるのは、学習者によって日本語の習熟度に差があり、そのような学習者たちをどのように組ませるのがよいかということです。王さんの実験授業では、習熟度に差がある学習者同士を敢えて組ませました。そして、自分より習熟度が高い学習者と組んだ場合と習熟度が低い学習者と組んだ場合では、言語習得に違いがあるのか、違いがあるとしたらより一層受益するのはどちらか、それはなぜかといった問いへの答えを追究しました。この興味ある問いへの答えは、この本を読んでものお楽しみです。

王文賢さんが研究テーマとして学習者同士の協働学習を取り上げたことには、特別な意義があると考えています。中国では、急速な経済発展と時代変化を背景に、新世代の若者が大学生となり、「曾て自分が学んだように教えても通用しない」と悩む教師が多いと聞きます。教師は教えるだけでなく、学習者の学ぶ力を引き出す存在であることを裏書きするこの研究が、そんな悩みへのヒントになることを望みます。また、現代の大学生は、「一人っ子政策」の下、兄弟を持たずに育った世代ですが、そのような若者が仲間と共に学ぶことの意義を実感できるとすれば、これは、日本語教育を超えて広く社会に貢献する実践であると言えます。一人でも多くの方が本書を手に取り、中国の日本語教育の将来を共に支える実践の輪を広げていただけたら幸いです。

2012年1月

国際交流基金 横山紀子

二

近年来,第二语言习得研究的理论和成果一直受到我国外语界的广泛关注,以中国学习者为对象的研究项目和论文专著不断问世,尤其是一些基于博士论文成果出版的研究专著跟踪学术前沿,成果斐然,为我国外语教育的研究和改革发展提供了有益的学术启迪和文献资源。本书就是其中的佳作之一。

本书的研究课题以中国高校日语专业学习者的合作学习效果为主题,对迈克·朗(Michael Long)的互动假说理论和维果斯基(Vogotsky)的社会文化理论进行了实践运用和实证考察,采用“合作听写(Dictogloss)”活动作为实验教学内容,通过对三种不同水平的学习者进行编组和追踪调查,得出了如下结论:

(1) 合作学习对学习者高一中组合和中一低组合的语法习得具有明显效果,而且中一低组合的进步程度强于高一中组合。由此说明合作学习在上述组合中对于不同水平的学习者均为有效,特别对于水平相对低的学习者更为有效。

(2) 在合作学习中,学习者均发挥了互相帮助的作用;虽然水平高的较多提供帮助,水平低的较多接受帮助,但双方基本上都实现了互助互惠的合作目标,有效地增进了“提醒”“注意”“假设”“验证”等认知活动的频率。

(3) 通过合作学习的体验,学习者整体上对合作学习都增加了好感,态度更为肯定,并更明确认识到这种学习活动有利于“集中注意力”,“提高日语学习效率”,“加深同学间的相互理解和友情”;在活动中他们对合作意识和互动讨论越来越重视。

在我国高等教育由精英教育转为大众教育的今天,合作学习的作用和效果越来越受到广泛的重视。本书的研究和上述结论向我们证实了基于社会文

化理论的合作学习实践和研究对于我国日语教育发展的学术意义和应用价值，同时也解答了一直以来人们对于合作学习的种种疑问。它对于实现以学生为主体的外语学习，促进不同水平的学习者共同进步和发展具有积极的意义。

这部专著是著者刻苦钻研和努力实践的结果。2001年著者作为海洋大学优秀的日语骨干教师考入北京外国语大学日本学研究中心日语教育学在职硕士课程，此后经过一年紧张的课程学习和两年艰苦的论文撰写，在中日双方指导教师的帮助下，完成了以克拉申（Krashen）的输入假说理论为实证研究基础的硕士论文，证明了语法教学中减少讲解、增加输入的习得效果。值得称赞的是，著者并没有就此止步，而是向着下一个目标——“输出假说”和“互动假说”的实证研究继续攀登和努力，经过远离家人的异国学习以及许许多多的难关，终于完成了博士论文，并通过答辩获得博士学位。

这部专著作为我国出版的第一部基于第二语言习得理论和社会文化理论的日语合作学习实证研究的学术专著，凝聚了著者长期对日语教育研究特有的执著和热爱，也包含着指导教师和周围亲友指教和关怀的结果。在此，我谨对专著的出版表示衷心的祝贺，对著者的努力和周围的支持表示感谢之意。

本书作为中国海洋大学学术著作资助项目和“北京日本学研究中心学术专著丛书”出版，不仅可以为国内外语界尤其是日语界增添新的研究成果和学术资源，还可以扩大我国学术研究的国内交流和国际影响。期待著者以此为新的起点，向着更高更广的目标继续不断地发展，为我国的日语教育研究和日语教育的发展做出新的贡献。

北京外国语大学教授、博士生导师

曹大峰

2013年春于北京

目次

第1章 序論.....	1
1.1 研究背景	1
1.1.1 協働学習.....	2
1.1.2 問題意識の所在.....	2
1.1.2.1 中国の大学における日本語学習指導の在り方.....	2
1.1.2.2 中国における日本語学習指導の問題点： 第2言語習得理論の観点から.....	2
1.1.2.3 中国における日本語学習指導の問題点：社会文化理論の観点から...	3
1.2 問題解決への提案.....	5
1.2.1 学習者同士のインタラクションを生み出す学習形態.....	5
1.2.2 協働学習活動.....	5
1.2.3 協働学習活動に対する教師と学習者の意識.....	6
1.3 研究目的.....	7
1.4 本研究の構成.....	7
第2章 先行研究の概観	10
2.1 はじめに.....	10
2.2 社会文化理論に基づいた学習の捉え方.....	10
2.2.1 社会的インタラクションを起源とする認知の発達.....	10
2.2.2 言語に媒介される心理的活動.....	11

2.2.3	最近接発達理論と足場作り	11
2.3	「アウトプット仮説」と協働対話	12
2.3.1	「インプット仮説」と「アウトプット仮説」	12
2.3.1.1	「インプット仮説」	12
2.3.1.2	「アウトプット仮説」	13
2.3.1.3	協働対話	14
2.4	第 2 言語学習における協働対話の実証研究	15
2.4.1	LREs に関する記述研究	16
2.4.2	LREs が第 2 言語習得に及ぼす効果	17
2.4.3	インタラクションパターン及び学習者間の役割	20
2.4.4	学習者の習熟度と協働対話	23
2.4.5	協働対話に関する研究の知見と残されている課題	26
2.5	協働学習活動に対する学習者の意識	27
2.5.1	共同タスクを行う仲間に対する好み	27
2.5.2	協働学習活動に対する中国人学習者の意識	28
2.6	中国人学習者の学習観や教師の役割に対する認識	31
2.7	先行研究のまとめと本研究の提起	32
2.7.1	協働対話に関して	32
2.7.2	協働学習活動や教師の役割に対する中国人学習者の意識	35
2.7.3	本研究の提起	35

第 3 章 研究方法 37

3.1	はじめに	37
3.2	参加者とペア編成	37
3.3	対象項目	38
3.4	事前・事後テスト	41
3.5	ディクトグロス	42
3.6	実験授業の手順	43
3.7	タスク用のテキスト	43
3.8	振り返りシート	44
3.9	アンケート調査とフォローアップ・インタビュー	44

第 4 章	【研究 1】習熟度が異なる学習者同士の LREs の 産出状況及び第 2 言語学習成果	45
4.1	研究目的	45
4.2	研究課題	46
4.3	データと分析方法	46
4.3.1	対象項目に関する LREs	46
4.3.2	テスト得点	47
4.4	結果	48
4.4.1	研究課題 1 の結果	48
4.4.2	研究課題 2 の結果	51
4.4.3	研究課題 3 の結果	53
4.5	考察	55
4.5.1	ペアタイプ、タスクの数及び学習目標と LREs との関係	55
4.5.2	対象項目についての知識状況と LREs との関係	57
4.5.3	言語形式の特徴と LREs との関係	59
4.5.4	習熟度の高低と協働対話からの受益	60
4.5.5	LREs 以外の対話の部分と学習成果	61
4.5.5.1	格助詞後の「は」について	61
4.5.5.2	連体節及び連用節の主格「が」について	62
4.5.5.3	異なるレベルの「気づき」と学習成果	63
4.6	まとめ	64

第 5 章	【研究 2】習熟度の異なる学習者が協働対話 において果たす役割	65
5.1	研究目的	65
5.2	研究課題	66
5.3	研究方法	66
5.3.1	分析対象データ	66
5.3.2	分析方法	66
5.4	結果と考察	67
5.4.1	支援の方向性からの分析	67
5.4.1.1	支援件数の分析結果	67
5.4.1.2	相互支援による互恵的な協働学習	69

5.4.1.3	パートナーの習熟度による役割の違い.....	72
5.4.2	支援の方法からの分析.....	72
5.4.2.1	支援方法のタイプによる分析結果.....	72
5.4.2.2	支援を提供することによる互恵的な協働学習.....	79
5.4.2.3	教えることによる一層の受益.....	82
5.4.3	協働対話において生じる認知活動の分析.....	84
5.5	まとめ.....	87

第 6 章 【研究 3】 中国人学習者の協働学習活動に対する意識 ... 89

6.1	研究目的.....	89
6.2	研究課題.....	90
6.3	研究方法.....	90
6.3.1	分析対象データ.....	90
6.3.1.1	アンケート調査に関して.....	91
6.3.1.2	フォローアップ・インタビューに関して.....	91
6.3.2	分析方法.....	91
6.4	結果と考察.....	92
6.4.1	ペア活動の好き嫌い.....	92
6.4.2	ペア活動の利点.....	95
6.4.3	ペア活動の問題点.....	101
6.4.4	パートナーから学べるもの.....	103
6.4.5	パートナーに関して重要だと思う点.....	105
6.5	まとめ.....	113

第7章 結論と今後の課題	116
7.1 本研究の総括.....	116
7.1.1 本研究の課題.....	116
7.1.2 【研究1】習熟度が異なる学習者同士のLREsの産出状況及び 第2言語学習成果.....	117
7.1.3 【研究2】習熟度の異なる学習者が協働対話において 果たす役割.....	118
7.1.4 【研究3】中国人学習者の協働学習活動に 対する意識.....	119
7.2 本研究の意義.....	120
7.3 本研究の限界と今後の課題.....	121
参考文献	123
英文文献.....	123
和文文献.....	127
中文文献.....	129
資料1 タスク用テキスト(網掛け:対象項目)	130
資料2 事前テスト	134
資料3 事後テスト	138
資料4 アンケート調査表	142
資料5 振り返りシート	144
本論文に関する既発表論文	145
謝辞	146

第 1 章 序 論

1.1 研究背景

1.1.1 協働学習

従来の学校教育においては、知識伝達の効率がよいことから、授業形態として教師主導の一斉授業が主流である。しかし、教師主導の一斉授業では、学習者の個人差が軽視されたり、学習者が受身的な学習姿勢になりがちだったりするといった問題があると言われている。近年、学習者の多様性や、自律学習、主体的能動的な学習の重要性に対する認識の深まりとともに、協働学習を取り入れる授業が注目を集めている。協働学習とは、学習者同士が共有する目標を達成するためにペア或いは小グループでお互いに協力しあって、問題を解決することによって行う学習である。

協働学習には2つの目標があるとされている。1つは、仲間同士の知識を学習のリソースとして活用して、相互の学び合いを生起させ、互恵的な学習を起こすことにある。もう1つは、仲間同士の助け合いや協力により、学習者のコミュニケーション能力や協調性の向上、よい対人関係の構築を促進することにある。最近、日本語教育の分野においても、協働学習の理念に基づき、学習者同士で作文を推敲するピア・レスポンスや、対話を通してテキストの読みを深めるピア・リーディングが提唱されている（池田・館岡 2007）。本研究では、協働学習に注目して、まず、協働学習が第2言語習得に及ぼす効

果、次に、協働学習活動における具体的な助け合いや協力の実態、最後に、教師主導型の授業を受けてきた学習者が協働学習に対してどんな意識を持つかについて検討することにする。

1.1.2 問題意識の所在

1.1.2.1 中国の大学における日本語学習指導の在り方

中国の大学で開講している日本語科目には、「総合日本語」¹という科目があり、文字通り、この授業では総合的な日本語知識の教授・学習活動が行われ、日本語の基礎文法のほとんどはこの授業で取り上げられる。教師や教材により細かい指導テクニックは多少異なるものの、指導の流れとしては概ね次のようになっている。まず、教師が一斉授業で教科書の各課に出現する学習項目を一つずつ取り上げ、それに関する知識を明示的に教授しながら、モデル文を提示する。次に学習者の理解をチェックするために、学習者に例文を作らせたり、中国語の文を日本語に訳させたりする。そして、それらの学習項目が織り込まれているテキストを読解させる。最後に、更なる理解や定着を図るために、教科書の中の練習問題をやらせる。練習問題は、たいてい学習項目の形式を操作する基本練習とロールプレイなどをする応用練習の2つの部分からなっているが、授業時間の制約で、実際、基本練習にとどまり、応用練習まで行うことは少ないというのが現状である。学習者はこのような一連の学習活動を通じて、言語項目を習得することが期待されているが、中国の日本語教育事情を報告する文献では、実際、文法知識は身につけるものの運用力が十分養成されていない、といった問題点が指摘されている（蔡2006）。以下、第2言語習得理論と社会文化理論の観点から、中国における日本語学習指導の問題点について考えたい。

1.1.2.2 中国における日本語学習指導の問題点：第2言語習得理論の観点から

第2言語習得の研究分野において、言語習得には、言語の意味伝達を中心とする活動の中で言語項目の特徴に気づき、文脈の中でその言語項目の形式・意味・機能の結びつきを同時に処理するプロセスが必要であるとされている。

上で述べた第2言語習得の観点から見ると、中国の日本語学習指導には、次のような問題点があることが分かる。学習者は意味中心の言語活動の中で

言語項目の特徴に気づくのではなく、最初から言語形式のほうに注意を向けるような指導を受けている。また、言語項目の導入や練習が個別に単文レベルで行われているため、それらの項目の使われるべき文脈が不明確であり、個々の言語項目が具体的にどのような場面に使われるのかが学習者に示されていない。つまり、脱文脈のもとでの言語項目の形式学習に偏っている。その結果、学習した時点では教師や教科書によって用意されている文脈にその言語形式を当てはめることができても、実際の言語活動の場面にはなかなか運用できない。

第2言語習得の観点から、学習者の言語運用力を向上させるには、文脈を伴って意味を処理する中で言語形式に注意を誘うような学習指導を工夫する必要がある。

1.1.2.3 中国における日本語学習指導の問題点：社会文化理論の観点から

社会文化理論は、ヴィゴツキー (Vygotsky 1978, 1986) の発達心理学をもとにしており、人間の精神発達を文化的・社会的環境の中で捉えている。それによると、精神発達にかかわる知識は人間の社会的活動の中で構成され、知識の獲得、即ち学習は、学習者が主体的に社会的活動に従事する中で他者とのインタラクション (interaction) を通じて実現される。そのため、社会文化理論では、対話が学習を促進するとされている。

近年、教育者は社会文化理論を教育分野に応用し、従来の教師の役割や学習理念を捉え直し、新しい教育観或は学習観に転換しようとしている。社会文化理論に基づけば、学習とは、受身的に知識を受容することではなく、他者とのインタラクションの中で能動的に知識を構築することである。この社会文化理論の学習観に従えば、従来のような教師主導の一方的な教え込みは学習者の効果的な学習につながらない。むしろ、教室という社会的な文脈を利用して、学習者が積極的に他者とのインタラクションを行う学習活動をデザインし、そのよう活動の中で学習者が自ら知識を構築し、学習を進めることを促進するのが教師の重要な仕事になる。

1.1.2.1 で述べた中国における従来の日本語教室の実態を見ると、学習者が何を学ぶか、どのように学ぶかはすべて教師に統制されており、いわゆる教師主導型の授業である。このような授業では、以下詳細に論じるように、①学習者の学習主体性の欠如、②教室の社会的機能の軽視、③学習リソースの

限定という3つの問題点があると言える。

① 学習者の学習主体性の欠如

上述したとおり、社会文化理論の観点から、能動的に知識を獲得する環境を学習者に提供するのが教師の重要な役割であるが、従来の中国の日本語教室では、教師の役割は学習者への知識伝授と伝授した明示的知識をチェックすることにあるようである。学習者は教師に伝授される知識を受身的に消化する立場に置かれており、学習の主体性が発揮されていない。中国の大学における総合日本語授業と教材を論じた曹（2005）も、教師による知識伝授に重きが置かれている中国の大学の日本語授業では、学習者の能動性が軽視されていると指摘している。

② 教室の社会的機能の軽視

社会文化理論によれば、教室は物理的な場所だけではなく、もっと重要なのは、大きな学習目標を共有する学習者が集まる社会的な場である。したがって、教師と学習者の間、特に学習者同士の間にインタラクションを生じさせる活動こそ、教室の社会性を有効に利用するものである。ところが、教師主導の一斉授業では、個々の学習者が熱心に講義を聞いたり、ノートをとったりして、黙々と伝授される知識やモデル文を覚えこもうとしている光景をよく見かける。学習項目の練習問題をやる場合でも、個々の学習者の個別作業が多く、直接他者とインタラクションを行う機会があまりない。たまたま学習者が教師の質問に答えたりすることがあるが、そのような質問と回答は真のコミュニケーションというよりも、その課で学習した言語項目の知識を確認する目的で行われるもので、教師は学習者の回答を事前に了解していることから、あまりインタラクションが生じないのである。

③ 学習リソースの限定

上で見てきた教師と教科書依存の一斉授業では、教師と教科書だけが知識のリソースとされ、クラスという学習共同体で学ぶ仲間の力が無視されている。また、学習は、他者とは無関係に個人の頭の中だけで生じるものとして扱われている。社会文化理論の観点では、学習は他者とのインタラクションを通じて、もたらされる社会的な活動である。よって、学習者同士の力をリソースとして十分活用し、相互の働きかけを促すことで、効果的な学習が引

き起こされる可能性がある。

以上をまとめると、従来の教師主導の一斉授業では、一見効率よく知識の伝授が行われているようであるが、最初の知識伝授から最後の練習活動まですべて教師の統制のもとで行われているため、学習者は主体的に自分たちの学習活動を営む機会が少ない。また、一連の学習活動の中で、学習者と他者の間であまりインタラクションが生じないため、教室の社会的機能も発揮されず、仲間の知識もリソースとして生かされていない。

1.2 問題解決への提案

1.2.1 学習者同士のインタラクションを生み出す学習形態

上述したように、社会文化理論では、学習や知識の獲得において、他者との対話や社会的インタラクションの重要性が強調されている。この社会文化理論を教室場面に適用すると、学習者の学習を起こすために、教師と学習者、また学習者同士のインタラクションを促すべきである。

中国の大学の日本語クラスはたいてい30人ほどの大きいサイズである。そのため、時間的制約により、授業で教師とやりとりする機会が与えられる学習者が限られてしまう。従って、教室という社会文脈を利用して、学習者同士の知識を学習リソースとして活用し、学習者同士のインタラクションを生み出す学習形態を考えるべきである。

1.2.2 協働学習活動

上で第2言語習得理論と社会文化理論の観点から、中国の日本語教室における学習指導の問題点を述べた。それらの問題点を解決し、学習者同士のインタラクションを促進するために、学習者同士による共同タスクを行う協働学習活動を提案したい。タスクとは、ある目的を成し遂げるために行う作業や課題である（白畑他 1999：300）が、ペアやグループで課題に取り組む中で、学習者は言語問題に遭遇する可能性がある。その場合、学習者同士は、それらの言語問題について議論するため、一時的に意味から言語形式に注意の焦点を向ける。その結果、特定の言語項目の特徴に気づくことが期待され